

共に生きるために

アジア学院 2017 事業報告書

2017年4月1日～2018年3月31日



学校法人 **アジア学院**
アジア農村指導者養成専門学校

ご挨拶

学校法人アジア学院 理事長

星野 正興

アジア農村指導者養成専門学校 校長

荒川 朋子



2 017 年度も神様のお守りと多くの皆様のお祈りとご支援により、研修事業が終了することを心より感謝申し上げます。

2017 年度は 6 月 22 日に前校長で理事長在任中でおられた大津健一先生が急性白血病で召されました。そのことは職員一同にとって大きな悲しみでした。先生は何よりも平和を愛する人で、先生が校長として在任した 6 年間、また理事長在任期間を含めると 9 年間は、あちこちでぎすぎすしていた人間関係が和み、小さな平和の種が随所に蒔かれ、アジア学院の本来の力が蓄えられ発揮された時期ではないかと思えます。この大津先生の在任期間中に東日本大震災の被害からの復興事業があったことは大きな恵みでした。結果として、先生がアジア学院において果たせられたもののほぼすべてがこの復興事業に関わるもので、神様は最も必要な時に必要なものを与えてくださるということが証されました。



2017 年度は 13 カ国 23 名の卒業生が農村指導者の資質を最大限に高めてそれぞれの母国に巣立っていきました。これで卒業生の総数は世界 57 カ国 1,384 名になります。2012-13 年に世界 12 カ国、229 名の卒業生を現地に訪ねて卒業生調査が行われましたが、その結果から導かれる形で、これら世界に広がる卒業生の相互間、また卒業生とアジア学院の間に建設的かつ協力的な関係を築くために、また卒業生の活動がより効果的に進められるように、卒業生アウトリーチ部門を設置する目標が掲げられました。2017 年度はそのための募金を始め、この部門の目的や業務内容について活発な議論がされ、2018 年 4 月にいよいよ正式に卒業生アウトリーチ部門を開設する運びとなりました。2018 年度はその基礎固めの年になると思いますが、卒業生との関係構築や卒業生の活動の発展のための事業を意識的に学院の事業に取り込んでいくことは、アジア学院の歴史においても新たな一歩になると思っています。

2017 年度は総務業務の重要性を認識し、その充実化を図るために職員 1 名を充てて作業を始めた年でもありました。震災から 6 年を経て、その被災の経験を活かしていくために、またけがや事故による損失を最大限に減らすために、学校安全の体制整備を含む危機管理のマスタープランの作成に着手しました。これまで財政や人員不足からなかなか手がつけられなかった危機管理の分野によりやく着手できたことをとてもうれしく思っています。

2017 年度も国内外から多くのボランティア、スタディーキャンパー、訪問者などをお迎えし、キャンパスはいつも活気に満ちていました。この事業報告書を開いていただき、その様子を感じていただけたらと思います。

学びにおいて、
もし教師だけが教えているならば、
そこには限界がある。
しかし学び手が自ら行動し学べば、
そこに限界はない。

オーガステュス・セナ・レックマ
ガーナ共和国学生

目次

農村指導者はどこにいるのか 学生募集の挑戦	2
個人の変革、コミュニティの変革 2017年度研修	4
アジア学院のフードライフ	10
卒業生は財産 2018年フィリピンスタディツアー	14
呼吸するキャンパス	16
支援者とのネットワーク	18
会計報告	22
2017年度 主な農作物の 生産量	24
2017年度 コミュニティ	25
2017年度 卒業生	back



学校法人 アジア学院
アジア農村指導者養成専門学校

「共に生きるために」
2017年度 事業報告書
(2017年4月1日～2018年3月31日)

印刷 株式会社 新晃社

© 2018 学校法人アジア学院
www.ari-edu.org

私は故郷でよくキノコ採りをしていました。アミガサダケが大のお気に入り、卵と一緒に炒めて朝食として食べ、サーモンや野菜と一緒にグリルすると夕食にも合います。残念なことにこんなに美味しい食材ですが、めったに見つけることができません。採れそうな場所を探すとしたら、やはり町から遠く離れた山中や森、進むにつれ道が細くなり最後は未舗装の道が山の中へと次第に消えていくような場所に生えています。湿度が十分であること、雪が降らず日当たりが良いこと、乾燥しすぎていることなど、条件が整っていることも大切です。また平地に隠れるように生えていることが多く、もし見つけても虫喰いや有毒の類似種ではないことをよく確認しなければなりません。



学生募集・卒業生アウトリーチ担当
マイカ・アンダーソン

農村指導者は どこにいるのか 学生募集の挑戦

アジア学院の農村指導者研修に適した候補者の発掘は、キノコ採りと似ています。難しい作業です。候補者は、遠隔の小さな村の出身であることが多く、アクセスが悪く連絡を取り合うのも難しいことがあります。未舗装道路はもちろんのこと、不安定なインターネットや電話回線、紛争等がある地域では先行きの見えない不安があることは言うまでもありません。その団体は果たして候補者をサポートしてくれる団体なのか？財源が伸び悩むこの時勢に、その団体やプロジェクトは財政的に持続可能かどうか？コミュニティはサポートしてくれるのか？候補者は指導者研修を受けるに値するかどうか？研修に来る動機が地位の為、昇格のためではないか？

個人的には、世界中を旅して優秀な候補者を探し回り、その想い一つ一つを汲み取ることができたらと思っていますが、そんなことはできるわけがありません。資料やパンフレット、メール、SNS、Web会議等あるものを駆使し、アジア学院関係者や友人にも手伝ってもらっています。

かつて優秀な学生だった卒業生たちも、かけがえのないリクルート・エージェントです。彼らは農村地域に住んで働いていることが多く、現地の言葉やその地域情勢などを理解したうえで、地域の様々な団体との良いつなぎ役になってくれています。卒業生が候補生にアジア学院での経験を語り、質問に答えてくれることもあります。また、指導者としての質や技術、目的、送り出し団体の使命や活動内容がアジア学院の目指すものと一致しているかなど、こちらに必要な情報も提供してくれます。急な要請であったり、少ない報酬であるにも関わらず、たくさんの卒業生たちが国を超えて、農村地域に埋もれた原石を見出すこの作業を積極的に手伝ってくれています。

また、青年海外協力隊補完研修生やアジア学院で経験をつんだボランティア等、海外で活躍するアジア学院体験者が年々増えています。彼らは地域の団体と共に、貧困軽減やエンパワメント事業などに従事していることも多く、それらの団体は信頼のおける送り出し団体となることもあります。

その他にも、現在海外で働いている元職員



ベトナムで農業研究者や地域の活動家に会うマイカさん。



や支援者、教会からの助力も得ています。現職員は、国際会議に参加したり、一時帰国をした際にも学生募集活動を行います。私自身、昨年ベトナムに卒業生を訪ねて行った際、有機農業に関するフォーラムに出席し、アジア学院を代表して 50 以上の地域の指導者や農民、省庁職員に向けて挨拶し、様々な事業の現場を訪れ、各団体が将来、アジア学院の研修に応募してくれる可能性があると思いました。

効果的に学生募集を続けていくために、私たちは新たにビデオ、報告書、プレゼンテーション用のスライド、そして学校案内（現在作成中）などの学生募集ツールを準備しました。また、学生や JICA 青年海外協力隊補完研修生などに向けた説明会も始め、アジア学院が候補者に求める質や資格がより明瞭でわかりやすくなり、それによりこれまで探求してきた戦略や目的が特定されてきました。

アジア学院はどのような人材を求めているのでしょうか？まず、提携できる送り出し団体を求めています。これまでアジア学院は、社会的弱者に確かに仕えてきた団体、主に民間や

宗教関連団体の農民協同組合や地域開発関係に携わる NGO や教会から学生を受け入れてきました。

申請する場合は送り出し団体での就業経験が 3 年以上必要となり、25~45 才までの方が対象となります。アジア学院が求める一番大切な資質とは、人々に仕えるための情熱があるかどうかです。自身を犠牲にし、逆境の中でさえ愛を忘れずにいられるか、心を開いていられるかが大切です。農業の経験も役に立ちます。アジア学院は人に仕える指導者や地域開発に重きを置いており、様々な分野の中でも環境保全、教育、小規模金融、先住民族の権利等に従事している地域の指導者を受け入れることも多いです。

選考過程は、団体と個人に分かれ、卒業生の訪問や面談が必要な場合もあります。完成した申請書は事業報告、エッセイや推薦書なども含め 100 ページ以上に及ぶこともあります。さらに何度も行われる追加のメールや電話連絡のやり取り等も含まれます。

各申請書類はアジア学院職員で構成される地域別選考委員会、さらに校長が中心とな

り構成される学生選考委員会により限なく審査され、最後に職員会議で決議されます。骨身を惜しまないこの選考過程により、アジア学院に最適な候補者を選ぶこと、そして他に類を見ない多様な人々から成る学びのコミュニティを形成することが可能となります。

アジア学院は魅力的な時間を提供するための場所ではありません。研修の目的は学生の地位や富を向上させるためのものでもありません。むしろ、自分のコミュニティへ戻った時に全てをささげるための準備といえるでしょう。これはとても労力のいることです。それでも、私たちは共に成長し、平和で健全な環境を持つ世界を構築することのできる、献身的な心ある指導者たちをこれからも魅了し、見出していきたく願っています。

個人の変革、 コミュニティの変革



ドウドウジレ・
プリンセス・ンカビンデ
南アフリカ 学生

私たちはよく、持続可能という言葉を使います。でも私たちNGOの働きは本当に持続可能なのでしょうか？むしろコミュニティがNGOに依存する状況を作り出しているのではないのでしょうか？

アジア学院の研修で、その答えを私は得たと思います。私たちは解決法やお金を持っていくのではなく、地域住民が自分たち自身の手で、地域の資源を使って解決することができるのだということを奨励していくのです。





2017年度
農村指導者研修プログラム

2017年4月1日～12日9日



副校長・教務主任 大柳 由紀子



2017年12月、アジア学院は無事9か月の研修を終え、13か国22名が卒業を迎えることができました。この研修を物心両面でお

支え下さった全ての方に、心からの感謝を申し上げます。
22名の学生たちは様々なことに直面しながらも研修に対する高い意欲を失うことなく、互いに助け合い、励ましあいながら研修を完遂することができました。9か月、自分の家族やコミュニティを離れて過ごすのは簡単なことではありません。生まれて初めて経験する寒さ、本やテレビでしか見たことのない国から来たクラスメート、母国語ではない英語でのコミュニケーションにも悩んでいました。家族との連絡を日常的に取れる者も取れない者もいます。4月の時点で、弟をテロで失った者さえいます。それでも悲しみも苦勞も共にし、喜びを分かち合いながら、この22人は9か月を乗り越えていったのです。

すべての瞬間を学びへ

4月の研修開始以来、学生たちは様々な研修を受けてきました。「指導者論」、「参加型農村調査法」、「プレゼンテーション技術」、「ファシリテーション技術」、「有機農業概論」、「畜産概論」、「化学農業の危険性」、「自然農業」、「バイオガス」、「立体農業の哲学」、「環境と開発」、「ジェンダー論」、「気候変動のもたらす問題」などの座学は43科目310時間にわたります。また農業実習は386時間に上ります。しかしながらこれらも、研修の中のごく一部にすぎません。授業から皿洗い、農業実習、清掃、朝の集会、見学研修も交流も寮生活さえ、私たちは研修の一部とみなします。「あなたが日本について、アジア学院に到着したその時から、すべての行動、すべての会話、すべての瞬間が学びです」と私はオリエンテーションで学生たちに説明します。その言葉通り、すべてを学びとしながら学生たちは成長し続けました。アジア学院の研修のユニークなところは、知識も技術も研修の「一部」としかみなさない点です。最終的に私たちが目指すのは、学生たち一人ひとりの人格的・内面的変革なのです。

質問の力

学生たちに向き合い、学びを支えるために、職員たちも研修技術の向上に努めてきました。特にコーチング技術は2年間にわたって職員研修を行いました。コーチング技術の中に「質問の力」というものがあります。コーチは対象者に答えを与えるのではなく、答えは対象者がすでに持っているのを、それを質問で引き出す、という考え方です。それに基づいてアジア学院では職員がよく学生に質問を投げかけます。昨年まではその質問をうけて懸命に考える学生たちの姿がみられたのですが、今年はもう一段階向上し、自分たちで非常にパワフルな質問をするようになりました。誰かの発表があれば、他の学生が質問をすることで考えを深めていくことも多くみられ、また見学研修に行った先でも深く重い質問をすることが幾度もありました。質問をされた側が悩んでしまうこともあり、それでも正面から受け止めて下さった研修先の皆さまには深く感謝申し上げます。

気づきと変革

アジア学院にやってきた当初、学生たちが研修に期待するのは「有機農業技術」と「リーダーシップ技術」であることがほとんどです。どうすれば自分たちの地域は豊かになっていけるか、日本という「先進国」で魔法のような答えが与えられるのだと信じて、学生たちはこの国にやってきます。日本の先進技術を学んで、それを自分の地域で実践すれば貧困は撲滅できる。そのような幻想は、実は多くの国際協力で行われている手法でもあります。しかしアジア学院は違います。「あなた方が必要なものは、すでにあなた方の周りに存在する。あなた方はそれに気づいていくことが必要なだけ。」「あなたの地域には豊かな資源と人材がすでにあるではないか？ 人々が捨てている畜ふんももみ殻も雑草も、すべては資源なのだ。人々が顧みない貧しい農民こそが、地域を豊かにする知恵をもった先生なのだ。」「あなたは機械を学びたいという。あなたの地域の農民は、みな大型機械を持っているの？ そうでなければ、人々にとって使えない技術になる。使えない技術なら、学ばないほうがましよ。」そう言われたからといって簡単に人の心が変わるわけではありません。むしろ最初は「僕はこんなことのために来たんじゃない」と反発する人もいます。しかし日常生活のすべてを学びとし、失敗も疑問も争いさえも学びとするアジア学院の姿勢



は、少しずつ学生たちの考えを変えていきます。農村リーダーとしてのここでの学びは自分のものではなく、コミュニティ全体のためのものであるという自覚の元、学生達は常に「自分の地域でどう活用していくか」を考え、さらにそれは農業技術だけでなく、社会福祉・教育・平和構築・環境にまで及びます。農村開発の目指すべき方向性はどこか、持続可能な発展とは何か、そもそも開発とは何か、なども頻繁に話し合われます。「私の地域は貧しいと思っていたが、本当は豊かだと気付いた。何も無いと思っていたが、多くのものに恵まれていた。人々は教育がないと思っていたが、彼らこそが地域に伝わる知恵をもつ素晴らしい人々だと気付いた。」と学生達が語る時、ここでの研修の目的の一つは達せられるのです。

学生たちの変革と成長が、多くのコミュニティをリーダーとしてより良い方向へと導いていく、と私たちも強く信じています。

学生たちの自己変容は、多くの場で見られました。私にとって、忘れられない出来事が一つあります。7月のある日のこと、学生たちは毎週ある Field Management Activity (農場経営活動) の授業を受けていました。その日、昼までは快晴で、いつものようにヤギたちは教室前の斜面地に放されていました。ところが突然非常に強い雨が降ってきました。それに気づいた学生の一人が「あ、雨だ」というと、担当グループの学生たちが「ヤギ!!」と叫んで駆け出して行ってしまいました。強い雨の中にヤギをおいておくわけにはいきません。学生たちはそれを職員任せにせず、自分たちがヤギを小屋に戻すべく駆け出して行ったのです。彼らにとってそれはアジア学院のヤギではなく、自分たちのヤギでした。それを当然のように授業を中断させて待っている他の学生たちと職員たちの姿に、私は一種の感動を覚えていました。そしてオーナーシップを持つこと、すなわち畑や家畜を「自分の物」という認識と責任感を持っていくことがこれほどの効果を上げるのか、という認識を新たにしました。

彼らの成長も変革も、まだまだこれからも続くと私たちは信じています。これからはコミュニティの人々が、社会の中でも弱い立場にある人々が、この卒業生たちと共に歩みつけ、学び続けてくれるからです。22名が草の根で働き続ける限り、彼らの学びと成長はとどまることはないでしょう。

ACHIEVEMENT

私たちはどれくらい『オーガニック』(有機的)だろうか？

『オーガニック』というのは、何もボカシ肥や堆肥、土着菌の作り方だけを言っているのではない。それは自分自身の中にどれだけ気付きがあるか、ということなんだ。

有機農業は、地域資源の活用、食料自給、自立、健全な環境と深いかかわりを持っている。でも今の世の中、私たちは自然の方法を破っているから多くの問題が起きている。私たちは金の事、つまり利益をあげ収量を増やすことしか考えていない。そうしてそれは公害や災害、不正義、環境破壊を引き起こしている。だからこそアジア学院の研修では有機農業の技術だけではなく、サーバントリーダーシップ、環境への代替的アプローチ、環境問題やローカリゼーションについて学んでいるんだ。

今私は自分自身に問いかける。私はどれくらいオーガニックだろうか。私だけじゃない、ここにいる皆にも、コミュニティにも、周りのすべての人々に問いかけよう。すべての人がそう問いかけることができたなら、それは大きなうねりとなって、いつかこの世界をより良い場所に変えてくれると信じている。

リドワン・
アウグスティヌス・サモシール
インドネシア 学生



HIGHLIGHTS

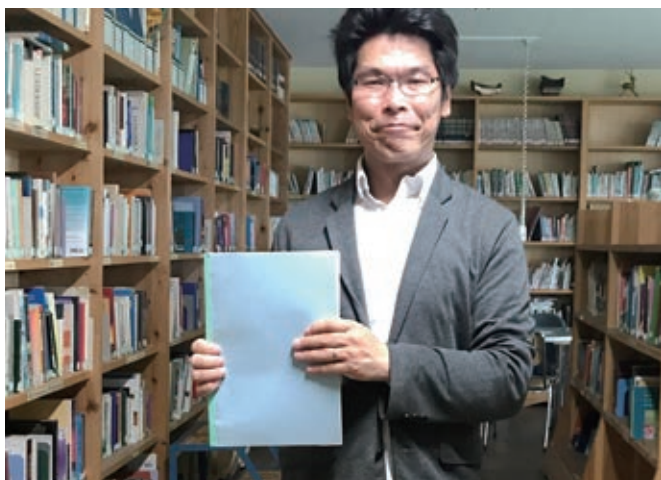
福島見学



9月には福島第一原子力発電所事故の影響を受けた福島県飯館村を訪問しました。この原発事故の被災地を学院として訪問するのは初めてのことでした。地震、津波、放射能の3つの災害を受けた沿岸地域や放射能被害が最もひどかった地域で新しい生活をスタートさせるための取り組みを見ることができました。原子力発電所の停止をきっかけに、まだ使用の難しい畑に太陽光パネル発電システムを建設し、電気供給インフラや電力販売による収入創出を図ろうとする市民による新しい電力会社の職員からも話を伺いました。

左の写真は、畑の上に高架式のソーラーパネルを設置し、太陽光を畑と発電との両方に使う“ソーラーシェアリング”を見学している様子。

シラバスの作成



アジア学院の教務課では、カリキュラム・シラバスを作成したいと考えていました。調査担当職員により、年間を通じたカリキュラムを体系的に記録し、文書化することができました。シラバスの役割は各講義の目的、ビジョン、期待される結果を明文化すること、カリキュラムに関わる講義他座学と実習やその相互関係などを分析し整理することです。職員及び講師にとって有力なツールであり、今後このシラバスがアジア学院の教育の質の向上に貢献することを願っています。

*カリキュラム・シラバス / 教育目的と学習支援を総合的に分析し、講義の内容や進め方を示す計画案。

見学・交流等、研修で
お世話になった方々

(順不同・敬称略)

特別講師

田坂興亜、村上真平、アルデンドウ・チャタジー、鎌田陽司、山田祐彰、桑原衛、芳賀欣一、小倉恭子、坂原辰男、田村修也、戸松礼菜、J・B・フーパー、ジョセフ・オザワ、永田佳之、ティム・ブルンヌラー、小出秀夫、全国友の会、友の会各支部、那須塩原警察署

農業関連見学・研修先

帰農志塾、金子美登・石川宗郎、田下隆一、桑原衛、民間稲作研究所

夏期個人研修

自由学園農場、関根養魚場、エルム福祉会、チーズ工房那須の森、こもれびのさと、テトテ

見学先・交流団体

【栃木県】 那須野ヶ原博物館、足尾銅山鉛毒事件学習(旧松木村跡、足尾製錬所)、渡瀬川遊水池、西那須野幼稚園、槻沢小学校、黒羽中学校、宇都宮北高校、宇都宮女子高校、国際医療福祉大学、(教)西那須野教会、(教)那須塩原教会、(リ同)家の教会しおん、(カ)大田原カトリック教会、那須高原教会、(教)矢板教会、(教)塩谷一粒教会、(教)四條町教会、(教)宇都宮上町教会、(教)鹿沼教会、(教)松原教会、(教)氏家教会、(教)足利教会、(教)足利東教会、(教)小山教会、(教)上三川教会、(福伝)鹿沼キリスト教会、(キ)栃木教会

【東京都】 日本キリスト教団婦人会連合、東京ユニオンチャーチ、日本バプテスト同盟婦人会、(教)中目黒教会

【他府県】 渡良瀬川鉛毒根絶太田既成同盟会、丸木美術館、ARISA(アジア学院サポーター)各位、各地ロータリークラブ

農村地域研修

【山形県置賜地区】 渡部務・美佐子、菅野芳秀、長井市レインボープラン推進協議会、基督教独立学園、黒沢巖、高畠共生塾(遠藤周次)、高畠町住民生活課エコタウン推進室、米沢郷牧場、JA山形おきたま農業組合、川西ときめきセミナー(佐藤恵子、原田加矢乃)、川西町役場(原田俊二町長)、しらたかノラの会、米沢興譲教会、草岡ハム加工組合、秋津ミチ子 【山形県戸沢村】 戸沢村役場産業振興課地域づくり推進係、国際交流協会、新庄最上有機農業者協会 【山形県庄内地区】 加藤勉一、相馬一広、志藤正一、庄内協同ファーム、月山パイロットファーム、共立社鶴岡生協、JA庄内たがわ當農農政課、(教)荘内教会(矢沢俊彦)、荘内教会保育園、藤島町農村環境改善センター、庄内産直センター、鶴岡市藤島庁舎エコタウン室、小野寺喜作 【秋田県仁賀保町】 土田雄一、佐藤喜作、JAにかほ、にかほ市役所、曹洞宗太白院、都市農村交流センター 【岩手県】 酒匂徹

西日本研修旅行

【東京都】 農村伝道神学校 【静岡県】 聖隷学園、聖隷クリストファー中・高等学校、(教)遠州栄光教会、十字の園、アドナイ館、第二アドナイ館、山中忍 【大阪府】 大阪南YMCA、NPO釜ヶ崎支援機構、野宿者ネットワーク(生田武志)、関西沖縄文庫、在日コリアンマイノリティ人権研究センター、(教)希望が丘教会 【熊本県】 大澤菜穂子、からたち、水保病資料館、ほっとハウス、川本愛一郎(証言者) 【広島県】 広島平和記念資料館、岸田弘子(被爆証言) 【三重県】 愛農学園高等学校、村上真平 【岐阜県】 永谷嘉規・香、高谷裕一郎、雑草塾

カリキュラム

研修時間総計：1,961時間

講義一覧

指導者論

アジア学院の指導者論
 サーバント・リーダーシップ
 アジア学院の歴史と建学の精神
 参加型農村調査法
 自律学習
 時間管理法
 プレゼンテーション技術
 ファシリテーション技術
 プロジェクト立案法
 ストレス管理法
 宗教と農村生活
 報告書作成指導
 障がいとユニバーサルデザインと教育

荒川 朋子
 荒川 朋子、大柳 由紀子
 荒川 朋子
 荒川 朋子、大柳 由紀子
 大柳 由紀子
 ティモティ・アパウ
 大柳 由紀子
 大柳 由紀子
 マイカ・アンダーソン
 ジョセフ・オザワ*
 ジョナサン・マッカーリー、ティモティ・アパウ
 キャサリン・フローディ
 ティム・ブルンヌラー*

開発論

環境と開発
 栄養概念
 共助組合論
 ローカライゼーション
 ジェンダー論
 足尾銅山鉛毒事件と田中正造
 気候変動のもたらす問題
 開発とアジア学院の使命
 気候変動と国際的パートナーシップ
 那須疎水と西那須野開拓の歴史
 友の会の活動について

田坂 興亜* (アジア学院理事)
 ザチボル・ラコー
 ギルバート・ホガング
 鎌田 陽司* (NPO 法人「懐かしい未来」代表)
 荒川 朋子
 坂原 辰男* (NPO 田中正造大学)
 永田 佳之* (聖心女子大・アジア学院評議員)
 J・B・フーパー* (アジア学院北米後援会、iLEAP 代表)
 J・B・フーパー* (アジア学院北米後援会、iLEAP 代表)
 田村 修也*
 全国友の会、友の会各支部

持続可能な農業・技術

持続可能な農業概論
 有機農業
 野菜・作物概論
 畜産概論
 作物病害虫管理
 適正技術
 化学農業の危険性
 熱帯における自然農業
 アグロフォレストリー
 生産者と消費者の提携
 バイオガスワークショップ
 立体農業の哲学
 農業技術実習
 畜産技術実習
 肉加工実習

アルデンドウ・チャタジー* (76年卒業・インド)
 荒川 治
 荒川 治
 ギルバート・ホガング、大谷 崇、ティモティ・アパウ
 荒川 治
 潘 炯旭
 田坂 興亜* (アジア学院理事)
 村上 真平* (自然農法家)
 山田 祐彰* (東京農工大学講師)
 戸松 礼菜* (帰農志塾)
 桑原 衛* (NPOふうど代表)
 芳賀 欣一* (戸沢村国際交流協会会長)
 荒川 治、櫻井 将伸
 ギルバート・ホガング、大谷 崇、ティモティ・アパウ
 大谷 崇、小出 秀夫* (ノイ・フランク)

日本語、日本文化

小倉 恭子*

有機農業実習

有機農業、畜産、食品加工の理論的
 および実践的知識の習得

野菜作物

ぼかし肥作り、堆肥作り、土着菌の採取と
 活用、天恵緑汁、魚のアミノ酸資材、水溶
 性カルシウム、炭焼きと木酢作り、粉殻く
 ん炭、自家採種、練り床を利用した苗作り、
 キノコ栽培

畜産

養豚 (人工授精、出産、去勢)、養鶏 (育雛、
 人工ふ化)、養魚、家畜衛生、飼料配合、
 発酵飼料作り、発酵床式畜舎

肉加工

ソーセージ、ハム

農場管理活動

グループによる農場家畜管理
 (野菜作物栽培、および畜産管理)
 フードライフワーク
 (自給自足のための農作業および
 給食準備)
 グループでのリーダーシップの実践

その他の研修

コミュニティ・ワーク (田植え、
 稲刈りなど)、内的成長を促す
 活動 (朝の集会、Growth Note、
 コンサルテーション、リフレクシ
 ンペーパー、学びの振り返り)、
 口頭発表、収穫感謝の日、
 国際交流プログラム、見学研修、
 農村地域研修旅行、西日本研修
 旅行、ホームステイプログラム
 など

*は特別講師

アジア学院の フードライフ



主体的参加型ラーニング

副校長・教育部長（農場長） 荒川 治

10 月2日から5日まで、タイのチェンマイでECHOアジア・インパクトセンター主催のアジア農業地域開発会議に参加することができました。アジアで貧困や飢えに苦しむ人々をどう支援し、その生活と食の安全をどう改善していくかがテーマでした。

9つの発表と42ものワークショップがありました。すべての発表といくつかのワークショップに参加しましたが、中でも印象的だったのは、カレン博士の「答えは部屋の中にある」という基調講演でした。博士は1990年から2003年までネパールで地域開発に携り、家畜の健康のためのトレーニングと女性のエンパワーメントに尽力しました。彼女はシアトルに本部を置くキリスト教獣医ミッションで活動し、学習者主体の参加型トレーニングを実践しています。これがアジア学院のフードライフを通じたリーダーシップトレーニングととても似ているのです。





体で学ぶ

Learning by Doing (ラーニング・バイ・ドゥイング) というのは、教室の中で単に勉強するのではなく、実際にそれを実践しながら自分の体に叩き込んでいくというものです。単なる知識を生きた実践のための知恵にしてゆきます。例えばぼかし肥料の作り方を学びます。実際に作っているところを見せます。しかしこれでは学習者は知識を得るだけです。知っているけれど使えないのです。実際に自分で作ってみて、発酵しているときの臭いや温度、色を感じ、できたぼかし肥を野菜に施し、その野菜を収穫して初めてその知識が身についていきます。参加型・主体的トレーニングの原則の中に「学習者ができることは絶対してはいけない。」というのがありますが、まさにこれは、ラーニング・バイ・ドゥイングと同じです。

創造されたものとともに

カレン博士の言葉です。「イエス・キリストの弟子として、私はすべての人が神をイメージして創造されたということを信じています。神の愛はすべての人に広がっており、すべての人は神が創造された通りの人となるための機会を与えられるべきなのです。だから私は一緒に働いている人々の素質と能力を信じ、彼らの学びと発見を信頼します。彼らが自分自身の学びに責任を持てるように、私は、必要な環境を整備し、学びを支援することを引き受けます。」参加型・主体的トレーニングでは、このようにして学習者は動機づけられ、自分の学びに対してオーナーシップと責任を持つようになります。強制されて学ぶということはなくなるのです。

農業についても似たようなことが言えます。自然の中に神が創造された法があると信じ、その法に敬意を払って初めて、十分な食べものを持続的に得ることができます。もし農民が土に強制的に食べ物を生産させれば、自然の生態系を壊し、病害虫が大量発生することになるでしょう。人は食べ物を育てることを土に強制してはならないのです。その代わりに、神が創造された美しい生態系を信じ、敬意を払うことで十分な食べ物が得られるのではないのでしょうか。

食堂は確かな学び場

フードライフ(給食) ザチボル・ラコー・ドゾ

2017年度のミールサービス(給食)の目標は、まず、食堂と野菜作物部門、畜産部門の関係を強めること、そして、学生自身が自分のコミュニティにおける自給や持続可能性の意味をより深く理解できるようになることでした。

研修が始まって、最初に私が給食コーディネーターとして取り組んだのは、食堂の主要メンバーが自分をオープンにし、透明性をもって信頼関係を築き、安定した健全なコミュニケーションが取れるように心がけることでした。二つ目に、彼らが他のメンバーを導くことができるよう、自分の仕事にオーナーシップを持ってもらうことでした。どちらも質の高い実りある時間を互いに持つことができました。

ある日、給食に関わる仕事のリストを作っていました。そのリストの数は58にもなり、まだ他にもやらなければいけない事がありました。家庭で、特に母親や女性たちが日々多くの作業に追われていることを実感する瞬間でした。



ジェンダー観を問う

ほとんどの学生たちの母国では、男性が台所で仕事をする習慣がありません。男性は家に帰ってくると出された食事を数分で平らげてしまいます。彼らにとって、母親や姉妹、妻や娘たちが何時間もかけて食事を準備してくれることに対する感謝を学ぶ良い機会です。さらに重要なことは、この研修を通して、男女が家庭での責任を分かち合うことの大切さを学ぶことができたことです。

栄養意識の向上

もう一つ達成したことは、栄養に関する授業と学院の食堂での実践を通して、学生が自分のコミュニティにおける食習慣やバランスのとれ



た食事について学ぶことができたことです。ほとんどの学生は、学院での生活を通して、食習慣について真剣に考え、それを改善しようと努力しました。安全で健康な食べものを食べるということが、自分たちの健康を維持するのに最も良い薬であり、家計を支えることにもなるという新たな気づきは、学生たちにとっても大きな喜びとなりました。

また、学院が教え実践してきた食堂と農場の関係づくりは、学生にとって確かな学びとなり、「これは自分のコミュニティでも実践できる。」という学生の声を聞いたことは大きな成果でした。常に給食部門には課題がありますが、それは障害ではなく、より改善していくための機会だと考えています。

HIGHLIGHTS



キノコの栽培

今年コイノニアの食卓に再び登場したアジア学院産のキノコ。2011年の地震と放射線汚染事故以来、私たちはキノコを栽培していませんでしたが、ハワイの教会のご支援によってキノコ(ヒラタケ)の屋内栽培が実現しました。担当の櫻井職員は、「学生、ボランティア、青年海外協力隊補完研修生との共同作業により、さまざまな栽培方法を試すことができ、学生たちの地域で何ができるのかをそれぞれが発見する良い機会になった。」と報告してくれました。

有機栽培は強い

フードライフ(野菜・作物) 櫻井 将伸

2017年、農林水産省が発表した日本全国のコメの作況指数は、アジア学院のある栃木県のみが93ポイントの「不良」ということでしたが、9月の長雨や10月の日照不足をものともせず、有機で栽培されたアジア学院の稲穂にはみごとに充実した実が付き、新規に入手した計80aの水田では近隣の農家さんからも褒めていただけるほどの成績を残しました。とくに今年からは海外からのご寄付により購入が可能となったコンバインを使用、稲収穫時の刈りこぼしも少なく、以前よりも効率的に収穫作業ができるようになりました。

アジア学院では数年前より疎植一本植えの手法を稲作に導入しています。これは田植え時に苗を密植することを避け、敢えて一箇所一本の苗を植え付けることによって、稲本来の持つ生き延びようとする生命力を発揮させ、稲の茎が太く、穂が大きくなるように栽培するやりかたです。さらに雑草対策として、田植え一ヶ月前から本田の代かきを2~3回行うことにより、雑草を排除するとともに水田表面にトロトロ層を形成し、田植え前後の深水管理とあわせて雑草種子が発芽しにくい環境を整えています。加えて田植え直後にはチェーンによる雑草防除を行い、その後、機械と手による除草を適宜実施することにより、最終的には狙った通りのコメの収穫量を確保することができました。

2018年1月、日本では野菜不足による価格高騰が話題となりましたが、アジア学院では畑作でも平年並みの収穫を得ることができ、ここでも有機栽培による収量の安定性が証明されることになりました。

自家採種の行方

アジア学院では自分たちで栽培する種子の自家採種を進めることにより、気候や環境変化に強い種子の生産に努めています。折しも2018年4月には種子法が廃止されました。農業を取り巻く





状況が大きく変化する中、今後も安心・安全な食糧生産のため、地域に根ざした地元品種確保のため、自家採取できる品種の幅を広げていきたいと考えています。

畜産の安全性と生産性

フードライフ(畜産) ギルバート・ホガング

2017年の畜産部門においては、重大な事故や伝染病の発生もなく、卵や豚肉の生産・販売において優れた実績を上げることができました。最大の変化は職員のティモシー・アパウと私が日本の自動車運転免許証を取得したことです。日々の地域資源の回収や、畜産部門のキャンパス外の圃場での活動に非常に有用なものになりました。

食料と学びの機会を与えてくれる山羊

山羊では2頭の雌山羊から4頭の子山羊が生まれました。うち雄の2頭は譲渡し、雌の2頭を残して今後の交配に活用する予定です。乳生産量は着実に増加し、コイノニアにこの一年で638リットルの山羊乳を供給することができました。これは餌への発芽小麦の導入による効果が大きく、昨年の2倍以上に増やすことが出来ました。その一部はヨーグルトやチーズに加工されています。現在、4頭の雌山羊と1頭の雄山羊がおり、今後の分娩に合わせて頭数も増加していく見込みです。また二つある放牧地には学生たちが、竹などの地域資源を用いて雨よけの小屋を作り、雨の日や冬季でも放牧を行うことが出来るようになりました。また山羊舎も学生の手により改良が行われ、これまでは給餌のためにそれぞれの小屋の中に入る必要がありましたが、外部から給餌出来るようになり、山羊に与えるストレスも軽減することができました。現在の山羊舎(旧・牛舎)は築30年が経過し屋根も老朽化していることから、今後ペンキの塗り替えを行う予定です。

動物が生きる場所を改善する

養魚では地域資源を用いた飼料により鯉の飼育を行いました。6月から7月には水田の雑草コントロールを兼ねて水田に鯉を放し、一か月間で約5倍に体重が増えました。10月には67キロの鯉を収穫することが出来、これは昨年1.2倍でした。今後、養魚池に女子寮の屋根に降る雨水を導入する計画を立てています。



養鶏ではいくつかの施設改修を行いました。従来の鶏舎2棟各3部屋を各2部屋に改築し、鶏がのびのびと過ごすことが出来るようになりました。また併せて鳥インフルエンザ対策として目の細かいネットを部屋の周囲に導入し、野鳥が鶏舎内に入らないようにしました。さらに老朽化していた予備の鶏舎の屋根と正面の壁を交換しました。産卵率は夏期には60%~65%、秋から冬の後半には50%~55%で安定していますが向上させる余地があるものと考えています。

養豚では分娩房の改装に取り組みました。内部に天井を設置し、開放部には新しくドアを設置して外部からの風が分娩房に入らないようにして気密性と保温性を高めると同時に、排気ファンを取りつけて換気を促進しました。また自動温度センサーとヒーターを連動させるシステムも導入しました。これにより厳冬期でも分娩房をより暖かく快適にすることができ、安心して仔豚の分娩を迎えることが出来るようになりました。その一方で2頭の母豚を失いました。1頭は拒食症で離乳後に絶食し、もう1頭は分娩後に後肢を分娩房の枠に挟んで抜けなくなるというストレスによるものでした。後者は分娩直後の事故であったため、仔豚の行く末が心配されましたが、他の分娩後の母豚につけることで無事離乳させることが出来ました。その後、新しくランドレース純粋種の母豚を導入しました。このような残念な事故に関わらず、約90頭の豚を生産することが出来ました。2017年度の豚肉の売り上げは約336万円に達し、今後も目標の300万円に向けてさらなる養豚活動の充実を図っていききたいと思っています。

卒業生は財産

2018年2月、10日間のフィリピンスタディツアーを実施。参加者はアジア学院サポーターを中心に日本各地や北米から集まった15人。本ツアーでは、ルソン島、ネグロス島、パナイ島、ギマラス島の4つの島を巡り、計14人の卒業生を訪ねました。

卒業生が働く現場を訪ね、そこで生活する人々と交流し、農村指導者としての彼らの活躍を目の当たりにすることは、単に話を聞いたり読んだりするよりも遥かに豊かな学びの機会を与えてくれます。今回の訪問国フィリピンにも、環境問題、ストリートチルドレン、マイノリティの差別、貧困など、様々な社会的課題があり、これらの過酷な現実を見ることは衝撃的ではありましたが、現実を知って、卒業生がそれらの課題にどのように取り組んでいるのかを知ることは、私たちにとても大変貴重な学びとなりました。

今回訪問した卒業生の1人、フリーダ・ラバン(2017年卒)は、彼女の勤める「アエタ子供の家」で、卒業後短期間のうちに顕著な変革を成し遂げています。アエタ族は、フィリピンの先住民であり、差別の犠牲者です。フリーダは卒業後すぐにアジア学院で得た知識を使って図書館の再構築に取り組み、それが終わるや否や、生徒と職員に有機農業について教え、子供たちと美しい段々畑を作りました。フリーダは、彼女が提供する技術が、アエタの子供たちの未来にとって有用になり得ると信じています。そして彼女は、「次の目標は、スタッフと一緒に外へ出て、より大きなアエタ族コミュニティに有機農法を教えることだ」と話してくれました。アジア学院の研修が地域社会へ即効性のある変化を作り出していることを目にし、職員としても大いに勇気付けられました。

私たちが訪れた別の卒業生は、同じサンバレス地方のジョエル・アヴィエール牧師(1986年卒)でした。ジョエルが若い頃、町で窃盗などの軽犯罪を繰り返す子供たちが地域の大きな問題でした。彼は自らスラムへ出向き、そういった子供たちと直接対話することでこの問題に取り組むことにしました。彼らに必要なのは、安全な環境、温かい食事、教育を受ける機会なのだというのを悟ると、彼は奥さんと二人、自宅で数人の子供たちの世話をすることを始めました。こうして孤児院「ジャイレ子供の家」が生まれ、現在も彼の自宅敷地内の施設で17人の子供が養育を受けています。それ以外にもジョエルは地元の子供たちのために保育園と小学校を運営、さらに次の事業として高校の建設を計画しています。

彼は敷地内の寮に私たちを4日間宿泊させてくれただけでなく、私たちが他の卒業生を訪問する時には、自らバスを運転しガイドを務めてくれました。彼は町の名士として人々から尊敬を集める人物ですが、人に仕えることを喜びとしている姿は、まさにアジア学院の求める

2018年フィリピン スタディツアー



サーバントリーダーであると、一同納得しました。

フェリーや飛行機を使って島から島へ移動する旅は、時として困難を伴うものです。ネグロス島では季節外れの台風に遭遇し、旅程の修正を余儀なくされました。それでもなんとか嵐の間を縫って移動を敢行。フィリピンで最初のアジア学院卒業生(最年長90歳)、今は修道院で生活しているシスター・ビシー(1977年卒)を訪問しました。彼女はすでに現役から退いていますが、貧しい農村の人々の土地と権利のために戦った日々を伺うことができました。

言葉以上に説得力を感じたのは、シスターが纏っている空気。大きな困難を乗り越えてきた彼女の心の強さと深い慈悲が私たちに包んでいました。ツアー参加者の多くの方が、彼女に会えたことに感謝の意を表していたのも頷けます。

翌日、フェリーの運航が再開され、私たちのグループは無事に次の目的地、パナイ島に到着。このツアーの企画全体をサポートしてくれたジョッフェル・レソル(1990年卒)が私たちを港で出迎えてくれました。ジョッフェルは何人かのボランティアスタッフと協働しながら、土地のない農民のためのコミュニティ開発や有機農業による自立支援、バイクタクシー運転手の労働組合作りなど多岐にわたる活動を行なっています。特に最近では、新たに海外出稼ぎ労働者の問題にも取り組

スタディーツアー参加者とジョッフェル・レソル(本人：最右端)のオフィス前で



シスター・ビシー(真中)



貧農民のコミュニティ開発に取り組むジョッフェル(左から2人目)



み、彼らとその家族の雇用促進・起業訓練プログラムを促進するためにフェアトレードコーヒーを扱うカフェをオープンしたばかりです。彼はこのような小規模ビジネスを地元で活性化させることが、将来的に出稼ぎ労働者の抑制につながると考えています。

フィリピンの卒業生の中でも特に精力的に活動を行なっているジョッフェルについて、そのルーツとも言えるエピソードを彼の幼馴染から聞きました。「彼は幼少の頃から弱いものいじめを許さない人だった。いじめられている子がいたら必ず助けに行く。それがそのまま大人になったような人だ」。虐げられている人々を見過ごせない彼の正義感の強さがよく表されています。さらにその背景には、敬虔なクリスチャン家系で育った彼の篤い信仰心ことを、最終日の夜、ジョッフェルとの対話の中で知りました。

今回訪れたすべての卒業生を紹介することはできませんが、彼らすべてには共通するある特質があります。それは地域社会への無私の献身です。自分よりも他者を優先する彼らの精神、その源は何だろう。畏敬の念とともに、すべての参加者がきつとそう自問していたと思います。現代の日本では、ほとんどの人が個人主義的なライフスタイルで暮らしています。一方、フィリピンの農村では地域社会とつながりを大切にする暮らしが今も残っています。アリエル・デ・ラ・クルーズ

(2005年卒)がいみじくも言いました「フィリピン人は自然、隣人、そして神を信じている。そして、それらと繋がっているから強いんだ」。

彼の言う通り、私はツアーで出会った多くのフィリピン人に信仰に根ざした助け合いと分かち合いの精神を見て取りました。自分がどんなに貧しくても、訪問者をできる限りのご馳走で迎えようとしてくれるフィリピン人のおもてなしの心は日本人以上です。そんな彼らの心のこもった歓迎に私たち参加者はいつも心から癒され、親愛の情を持つことができました。豊かな暮らしの中で死人のような顔をしている日本人とは対照的に、貧しさの中でも明るく笑顔で暮らしているフィリピン人。そんな彼らを見てみると、「本当の豊かさとは何だろう？公正な社会とは何だろう？」と考えずにはいられません。このスタディーツアーは、私たち自身の生き方と私たちの生きる社会のあり方を見つめ直す機会を与えてくれました。そして「卒業生はアジア学院の財産」、そう実感させてくれる旅でした。

募金・国内事業課
(支援者サポート・広報)
八木沢 淳



呼吸する キャンパス



教育的ハブとして成長するアジア学院

募金・国内事業課(支援者サポート・広報) 八木沢 淳

2017年度はアジア学院を舞台に様々なプログラムが展開されました。その中にはいくつかの新しい試みもあり、これまでとは違う業界から参加される方も多く見られました。

もっとも印象的だったイベントとして5月に開催した「How to Live Peace in Community」(共同体の中で平和を生きる)がありました。これはアジア学院の職員にコーチングを指導して下さった関京子さんと森川有理さん、それから平和活動家のウィンドイーグルさんとのご縁で立案され、アジア学院と共同で作上げられた「平和」がテーマのリトリートプログラムでした。この5日間の合宿形式のプログラムには、ビジネス業界からプロコーチや経営コンサルタント関係の方々が集まってくださいました。これまでアジア学院とはあまり縁のなかった方々でしたが、アジア学院の多民族・多文化共生や土とまみれる日常にカルチャーショックを受けたり、学生の現地の話に涙したりする方もあり、多くの方が「日本にこんな場所があったのか」「人生が変わる体験だった」と感動をあらわにされていました。こ

れまではあまり接点のなかったビジネス業界へアプローチし、アジア学院の魅力を感じてもらえたことは、今後の可能性を期待させる大きな成果でした。

このように新しいプログラムやイベントが始まったことにより、今まで主流だった教会や学校、農業関係以外の人々の来校も増えていきます。アジア学院が長年培ってきた教育的リソースは他に類を見ない深さと広さがあり、他では味わえない貴重な学びを提供できる豊かさがあります。これらをもっとたくさんの人たちに知ってもらい、学びの場として活用してもらうことで、アジア学院が世界と日本を繋ぐ拠点、あるいは様々な業種や世代が行き交う「呼吸するキャンパス = 教育的ハブ(hub)」になることを期待しています。





ここだからこそできるプログラム

募金・国内事業課(外部プログラム・那須セミナーハウス主事) 山下 崇



アジア学院には、“スタディキャンプ”という宿泊プログラムがあります。キャンパスで暮らす多様な人たちと、“食べものと命”の大切さを分かち合い、平和について考えることを目的としています。毎年、高校や大学、教会など国内外から約500名の人たちが参加しています。

スタディキャンプに参加した団体

サレジオ神学院 KIITOS ピースインコミュニティ日本
写真芸術専門学校 非電化工房 宇都宮大学重田ゼミ
日本獣医生命科学大 DIFAR 宇都宮大 NPO 企業塾
東京外国語大坂井ゼミ 千里国際高 クライストチャーチ
横浜 ICU 高校 代田教会 SAENATAR 自由の森
学園高 勝山学園 聖隷クリストファー高 共愛学園
新島学園 明治学院大宗教部 明治大寺田ゼミ
立教大 YMCA 中央大 YMCA 清泉女子大 YMCA
京都上賀茂教会 SCF 桜美林大、青山女子短大、新島
短大 同志社大 上田高校 学生 YMCA 非電化工房
佐久総合病院 東海大医学部 日本ナザレン教団
HTC ボランティア 桜美林大桃井ゼミ ICU 宗務部
文京学院大甲斐田ゼミ 佼成学園高校 東海大小早川
ゼミ 日本健康医療専門学校 学生 YMCA 未来塾
関東教区中高生キャンプ



インディアンカレーワークショップ

インド人スタッフのベロさんの指導で、カレーラーを使わず、本場のスパイスと、アジア学院の食材を使って作ります。性別、年齢の違いを乗り越えてみんなで、話し合いながら、スパイスの量、肉や野菜の大きさを決めていきます。どんな味になるか最初は想像もつきませんが、最後には必ず最高のカレーになります。隠し味はみんなで協力した時間です。とってもおいしい香りが漂っていますが、すぐには食べません。必ず命を犠牲にしてくれた、食べものに感謝のお祈りをします。みんなで楽しく、おいしくカレーを食べて、食べものと命の大切さ“フードライフ”を体験します。



アジア学院学生とのトークセッション

5人でテーブルを囲み、英語でコミュニケーションをとりながら、彼らの国でおこるリアルな現状を知ることができるプログラムです。農業の話だけではなく、コミュニティリーダーとしての活動、孤児院、若者や女性のエンパワーメントなど話は多岐にわたります。彼らの話からアジア学院生たちの研修の目的を知ることができます。

写真(上)は、学生たちに話すタフィーさん(ジンバブエ出身)。「私の夢は HIV エイズで親を亡くした子供や、自ら HIV エイズにかかってしまった子供たちとともに、健康な有機野菜を育てることができる農場を作ることです。」

命を感じる有機農業体験

アジア学院では、ごはん前の朝と夕方 1 日 2 回のフードライフワーク(農作業+給食調理)を行っています。農場では、ニンジンの花が見られるかもしれません。ニワトリ小屋では卵が産まれる瞬間が見られるかもしれません。豚小屋では糞の掃除をするかもしれません。ぜひ一緒に働いて、食べものと命を感じる体験をしてみましょう!

おながすいたら、アジア学院で育てたお米、お肉、採れたての野菜や卵を使った料理が待っています。



支援者との ネットワーク

夢を共有する — アメリカ講演ツアー報告 —

国際協力課 キャシー・フローディ



アジア学院が学生に教えていることの一つに、数十年後の自分たちのコミュニティの姿を思い描くということがあります。彼らのこの壮大な夢は一人の力で成しえるもの

ではありません。私たちは彼らとその夢を、他の人々と情熱をもって共有するようにと励ましています。この熱い思いが他者へ伝わっていくことで、彼らのビジョンは育てられ、世界中の農村地域に持続的な変化をもたらすことができるようになるのです。

2017年の10月と11月、アメリカのニューイングランド州、バージニア州、フロリダ州にいる支援者の方々を訪ね、アジア学院の夢を共有して来ました。訪問先は創設者高見敏弘（名誉学院長）のアメリカ時代のゆかりの地が多く、この旅は彼の足跡を辿っているようでもありました。このアメリカでの講演ツアーには、アジア学院から2人の職員、インド出身のザチボル・ラコー（通称アチボ、00年度卒業生、09年度研究科生、現職員）、私キャシー・フローディ（アジア学院国際協力コーディネーター）とアジア学院北米後援会から1人の職員J・B・フーパー（アジア学院北米後援会専務理事）が参加しました。

1970年代に高見がアジア学院を始めるに当たって多くの人と夢を共有した時と同様、現在においても支援者の方々との夢の共有は大切なことです。移動やコミュニケーションが簡単になり、今日の世界は「小さく」なっていますが、飢えや飲料水の確保、教育という最も基本的な問題を抱え、解決からほど遠いところにある地域がまだたくさんあることはあまり知られていません。しかし、これらの問題を解決に導くためにもアジア学院の研修が有効であることを多くの人々に伝えていく必要があると思っています。

今回のツアーの軸はアチボのストーリーでした。彼女の故郷であ

る東北インドのナガランド州は、女性への教育は不要だと長く信じられてきた厳格な家父長制社会でした。父親を亡くした後、家庭は絶望的に貧しくなりましたが、母親が家族を支えてくれました。母親は夫がいなくても娘には自立して生きていってほしいと、様々な困難を乗り越えながら、アチボを学校に進学させました。

彼女の語る人生経験談は人々を魅了します。彼女自身だけでなく、多くの支援者によってアジア学院の研修を受けた卒業生たちが各地で豊かな実を实らせ、世界中に変化がもたらされるのだと語ってくれました。そして、違った角度から世界を見つめなおすようにとアメリカの聴衆に問いかけました。

途中、私たちは長年の友人、宣教師、元ボランティア、元インターンなどを訪ねました。彼らはアジア学院で新しい友人に出会い、そして地球を守るために何ができるかを真剣に考えたことで、彼らの人生が豊かになったと話してくれました。また、アジア学院の活動によって触発された人々や教会も訪問しました。「私たちは、アジア学院の使命に似た使命を掲げる他のいくつかの団体を支援していますが、アジア学院の方々が訪問してくださったことは、素晴らしい財産です。」とニューヨーク州アルバニーのウェストミンスター長老教会で出会ったローリス・ウィルソンさんは語ってくれました。





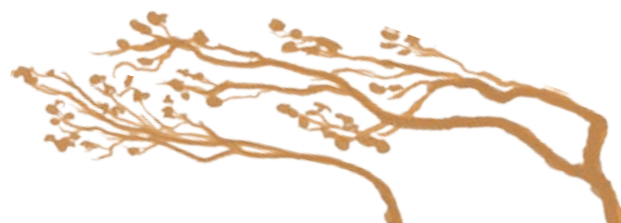
北米教会からの特別な“ギフト”

那須野が原放射能問題を考える住民の会(NRARP)は、地域の放射能の状況を計測し続け、そのメンバーが計測員を務めるアジア学院ベクレルセンターは、那須セミナーハウス内で主に食べものと土壌の放射能を計測しています。2017年度はカナダの教会団体他の支援を受け、ベクレルセンターが維持され、教育活動が拡充されました。

フードライフ部門でも、カナダの教会団体からのご支援を受け、2台の新しい収穫機を購入しました。荒川治農場長は、「私たちは大豆と米の収穫機の両方を15年以上使用していましたが、もともと中古機械であった為、穀物が詰まってしまい頻繁に故障していました。大豆収穫機も状態は万全ではなく、豆が地面に落ちてしまい、それを集めるのに多くの人手を要し、収穫に2週間以上の時間がかかっていました。今では数日で収穫できるようになりました。支援者の皆さまに感謝します。」と語っています。

インターンシップ

アジア学院は、プリンストン神学校、セント・オラフ大学、ウェルズリー大学など、米国の大学とのパートナーシップを通じ、2017年夏には5名がインターン、1名が3週間のインターンとして参加しました。彼らは、「アジア学院の人々と会話をし、生活を共にすることで、世界への視野が広がった。」「どこで生活をしようとも、抱えている課題は似ているのだということに気づいた。」とアジア学院での体験を振り返りました。





国内のネットワーク活動

国内事業課（販売・広報） 佐藤 裕美

40年以上にわたり創設時の志を今に引き継ぎ、時代や環境に応じて学びの手法やその在り方を変革していくアジア学院は、アジアやアフリカの農村で困窮する人々に奉仕する人材を養成する教育活動を行っています。日本には数多くの国際協力 NGO 団体があり、規模の大小を問わなければその数は数千を超える中、アジア学院が日本で最も古い歴史のある国際協力 NGO のひとつとして存在し、活動を継続できるのは、多くの方がその重要性を理解・共感し、応援してくださっているからです。

多くの志願者の中から奉仕する指導者となる学生たちを選考・招聘することに始まり、9か月間の充実した教育と学習、滞在サポートのために、年間1億3千万円以上の費用がかかります。実施に必要な資金は、諸団体からの奨学金をはじめ個人や団体からの寄付金、そして国内事業課が担当する外部の日本人や欧米人向けの教育活動プログラム、農産加工品の販売、各種イベントからの収入によって構成されています。

国内事業課が企画し実施するプログラムやイベントは、創立時から蓄積された知識とノウハウを活用し、さらに参加者のニーズを取り入れて編成され、国籍を問わず幅広い年齢層の方にフードライフの体験とアジアやアフリカの農村を知る機会に触れることを主軸としています。また農産加工品の販売では、農場職員と学生、ボランティアたちが自給自足に留まらず支援者の皆様と自然の恵みを分かち合えるよう心を込めて農作物を育て、バザーや通信販売を通して購入者に届けています。これらの国内事業課の活動は、2017年度は特に農場や教務など他のセクションとのより密な連携をすすめることによって、アジア学院の外部の人々が食と命の尊さを学び五感で感じることができる機会、そしてご来校頂いた方には、海外からの人々との共同生活や対話を通して、多様な背景の人々が共に助け合って生きることの大切さを理解し共感できる場を提供することができました。

国内事業課では、食べることで生きることについて学院内外の人々が同じ視座で共に考え互いに育む場、つまり共育の機会の充実が、学院の運営を支える収入創出の礎の一部となっていることを常に心掛け、また新しい発想を取り入れながら常に発展していくことを目標としています。

国連 SDG(持続可能な開発目的)

国連や各省庁、国際協力 NGO 団体などが、教育機関や企業などへ向けて SDGs の啓蒙を促進するよう働きかけが進んでいることを受け、国内事業課では一般社団法人環境パートナーシップ会議への訪問や聞き取りを行い、中学生以上の学生や社会人を対象にしたアジア学院の活動とSDGsの関連をまとめたフライヤーを作成しました。

玄米せんべい登場

支援者の方々にご利用頂いている主な商品は豚肉や卵、米、大豆などの農産品、そしてクッキーや醤油、ニンジンジュースなどの加工食品があります。また2017年度は、在庫となってしまった古米を利用し商品化できるよう検討し、新たに玄米せんべいの製造と販売を行いました。

先述の農産品については、人づてにその味や品質の良さが少しずつ伝わっており、安定した需要があることなどから売上は毎年微増傾向にありますが、自然環境や動物を完全にコントロールすることはできないこと、またアジア学院での学習や実習が最優先されるため生産量が安定せず、一時的に供給できない時期が発生してしまうなどの課題がありました。それに対して、野菜作物、畜産、給食、販売のそれぞれの責任者と共に学院内の需給を確認し、余剰がどれくらいになるか、つまり販売できる分はどのくらいかを予測した上で生産計画を明確にすることをを行い、次年度の成果に繋げることができるよう、取り組んでいます。

出店したイベント

ALFS(アジア婦人友好会)バザー、ワークスみぎわ木工市、(公)聖テモテ教会バザー、日本基督教団関東教会総会、アースデイ那須、カトリック松が峰教会、日本基督教団関東教会婦人会修養会、クローチェバザー、日本基督教団神奈川教会婦人集会、日本キリスト教団宣教総合協議会、(教)西那須野教会夏まつり、58口ハスキッチン、宇都宮北高等学校祭、日本聖公会東京教会フェスティバル、黒磯南高等学校祭、グローバルフェスタ、マメゾン光星バザー、土と平和の祭典、子羊の家バザー、栃木の縁日、カトリックさいたま教会大会、大田原産業文化祭、(教)鹿沼教会チャリティコンサート、フェアトレードまつり、立正佼成会那須教会バザー、栃木有機農業映画祭、ILBS(国際婦人福祉協会)クリスマスチャリティバザー、大日向マルシェ



グローバルフェスタ出店の様子



SDGsのフライヤー



新商品「玄米せんべい」

国内支援者・支援団体

(10万円以上の寄付・順不問)

教会関係

河内キリスト集會
神戸ユニオンチャーチ
国際基督教大学教会
東京ユニオンチャーチ
日本ナザレン教団
(カ) 援助修道会
(カ) 大田原教会
(教) 阿佐ヶ谷教会
(教) 西那須野教会
(公) 聖アンデレ教会
(公) 聖オルバン教会
(公) 東京聖三一教会

諸団体

浦和友の会
海音里
学生キリスト教友愛会
光陽電気工事(株)
全国友の会中央部
チロウヒーター(株)
東京霞ヶ関ライオンズクラブ
那須友の会
ワールドファミリー基金
(医社) サマリヤ会
(一社) アジア婦人友好会
(一社) わかちあいプロジェクト
(株) 寫ネットワーク
(公財) あしぎん国際交流財団
(公財) 俱進会
(公財) 新宗連北関東東総支部
(公財) 全国友の会振興財団
(公財) 三菱UFJ国際財団
(公財) 森村豊明会
(公社) スコーレ家庭教育振興協会
(宗) 立正佼成会那須教会
(有) 知立商事

学校

(学) 女子学院
(学) 青山学院中高等部
(学) 関西学院中学部・高等部
(学) 共愛学園中学校・高等学校
(学) 共愛学園前橋国際大学
(学) 女子聖学院中学高等学校
(学) 清和学園清和女子中高等学校
(学) 明治学院中学校・東村山高等学校

(医社) 医療法人社団 (一財) 一般財団法人 (一社) 一般社団法人 (学) 学校法人
(カ) カトリック (株) 株式会社 (キ) 日本キリスト教会 (教) 日本基督教団
(公) 日本聖公会 (公財) 公益財団法人 (公社) 公益社団法人 (公信) 公益信託
(財) 財団法人 (社) 社団法人 (宗) 宗教法人 (特活) 特定非営利活動法人
(独) 独立行政法人 (福ル) 日本福音ルーテル教会 (バ連) 日本バプテスト連盟

奨学金

東京南ロータリークラブ
トータルエナジージャパン合同会社
日本キリスト教協議会
日本基督教団国際関係委員会
(カ) 聖コロバン会
(カ) 聖心会(あけの星修道院)
(一財) アジア農村交流協会
(一財) 新倉会
(一財) 日本福音ルーテル社団
(一財) まちづくり地球市民財団
(一社) 東京アメリカンクラブ
(公) 東京聖トモテ教会聖トモテ奉仕奨学金委員会
(公財) 大阪コミュニティ財団
(独) 日本学生支援機構(JASSO)
(公信) 久保田豊基金

海外支援者・支援団体

(10万円以上の寄付・順不問)

教会関係

カナダ合同教会
The United Church of Canada
米国合同教会・キリスト教会共同世界宣教
Global Ministries of the United Church
of Christ and the Christian Church
(Disciples of Church) - Common Global
Ministry Board
合同メソジスト教会世界宣教
The United Methodist Church - General
Board for Global Ministries

諸団体

アジア学院北米後援会
American Friends of ARI

奨学金

アメリカ福音ルーテル教会
Evangelical Lutheran Church of America
合同メソジスト教会世界宣教
The United Methodist Church - General
Board for Global Ministries
Bread for the World
Hartstra Foundation (オランダ)

アジア学院が訪問した
教会・団体・学校

(国内・一部アジアを含む)

訪問教会

(教) 阿佐ヶ谷教会、(教) 奥沢教会、(教) 銀座教会、(教) 経堂北教会、(教) 国分寺教会、(教) 氏家教会、(教) 松沢教会、(教) 西新井教会、(教) 千代田教会、(教) 洗足教会、(教) 代田教会、(教) 池袋西教会、(教) 番町教会、(教) 目白町教会、(教) 豊南坂教会、(公) 管区事務所、(公) 聖アンデレ教会、(公) 聖マーガレット教会、(公) 東京教区青年会、(公) 東京聖トモテ教会、(公) 東京聖三一教会、(福ル) 東教区常議員会、(福ル) 藤が丘教会、(福ル) 保谷教会、(福ル) 本郷教会、Karen Worship Service、横浜ユニオンチャーチ、教団リフォーアス500コースカンファレンス、湖畔聖書学校、合同メソジスト教会アジアオフィス(韓国)

訪問学校(講演含む)

恵泉女学院大学、恵泉女学院中・高校、国際医療福祉大学、女子学院、新島学園、星槎国際学園、青山学院短大、早稲田大学、栃木県立那須拓陽高校、日本聾啞学校

訪問団体(講演含む)

国際協力NGOセンター(JANIC)、Tokyo American Club Women's Group、Wesley 財団、アジア農村交流協会、ロータリー米山記念奨学会、ワークハピネス、浦和友の会、環境パートナーシッププラザ、東京南ロータリークラブ、久保田豊基金、高崎友の会、自動車技術協会、森村豊明会、聖コロバン会、早稲田YMCA(西早稲田国際平和ゼミナール)、立正佼成会那須教会、The ECHO Asia Conference 2017(タイ)、Amity(NGO)と南京大学主催のワークショップ(中国)

ARI サンデー

(キ) 宇都宮松原教会、(キ) 栃木教会、(教) 宇都宮上町教会、(教) 早稲田教会、(教) 中目黒教会、(教) 宇都宮東教会、(教) 塩谷一粒教会、(教) 四條町教会、(教) 氏家教会、(教) 鹿沼教会、(教) 小山教会、(教) 上三川教会、(教) 西那須野教会、(教) 足利教会、(教) 足利東教会、(教) 那須塩原教会、(教) 矢板教会、福音伝道教団鹿沼キリスト教会

西日本キャラバン

(キ) 岐阜教会、(教) 上賀茂教会、(教) 甲南教会、(教) 神戸栄光教会、(教) 神戸雲内教会、(教) 宝塚教会、(教) 豊中教会、(教) 吐田郷教会、(教) 洛西教会(イベント&ホームステイ)、J.House、Peace & Nature(イベント&ホームステイ)、Tim Boyle(ホームステイ)、YMCA 学院高等学校、アンシュラムセンター(ホームステイ)、ヴォーリズ学園、大阪YMCA インターナショナルスクール、大阪女学院短期大学、小笠原真由(ホームステイ)、関西学院千里国際中等部・高等部、関西学院大学(商学部、法学部、国際学部、神学部、総合政策学部、理工学部、教育学部)、関西学院中学部、岐阜キリスト教会(宿泊)、岐阜バプテスト教会、日下星乃(ホームステイ)、啓明学院、見満紀子(ホームステイ)、神戸ユニオンチャーチ、古民家ろっきゃお(イベント&ホームステイ)、四国学院、頌栄短期大学、清和女子中高等学校、聖和短期大学、天国屋カフェ、同志社国際初等学部、同志社大学(新町、今出川、京田辺キャンパス)、名古屋ユニオンチャーチ、堀江信一・ひとみ(ホームステイ)、丸谷一耕(ホームステイ)、箕面市国際交流協会、三輪恵愛(ホームステイ)、桃山学院高等学校

会計報告

事務局長 佐久間 郁

皆さまのご支援に心より感謝申し上げます。

貸借対照表

2017年度は資産が前年度末より約5,050万円減少し、約10億2,451万円となりました。これは固定資産の建物の減価償却分及び現金預金、有価証券等の増減によるところが大きいと言えます。一方負債の部は約1,095万円減少し、約2億1,786万円となりました。長期借入金の予定返済等合わせて約446万円の負債を減らすことができました。

事業活動収支

2016年度に1名(募金課)、2017年度は2名(調査担当、給食担当)職員を増員し、人件費(手当等含)は約750万円増えましたが、これらは将来への投資と考えています。

海外からの奨学金や寄付金は減少傾向にあります。しかし、関係団体訪問や努力の成果、カナダの教会からハーベスター(大豆及び稲)の購入の為の寄付及び、アジア学院ベクレルセンターの教育活動拡充助成の為に寄付を頂くなど、プロジェクトベースの助成金が増えました。

国内寄付は予算比では約370万円減となっていますが、前年比では約537万円増加しました。募金収入の詳細分析と、それに基づく戦略(各団体や個人への案内や訪問等)実施の成果が表れているといえます。

補助活動収入は過去最高の約2,785万円の収入となりました。今後の収入増に向け、募金・国内事業課の役割は大きく、課題もありますが、希望も見えてきています。

人件費の750万円増は大きく、奨学金や寄付の収入減はあるものの、各職員やセクションの努力の結果新たな活動による収入増も出てきました。事業活動収支が黒字で終えられたことは評価できるのではないかと考えています。

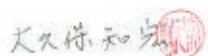
引き続き厳しい財政状況がではありますが、今後も限られた人的・金銭的資源の中、支出抑制を意識しながら、アジア学院のミッションの実現に向け、財政の安定化に努めていきたいと考えています。

監査報告

学校法人アジア学院寄付行為第7条の規定に基づき、2017年度の事業および会計の状況について監査した結果、適性に執行されたものと認めます。

2018年5月7日
学校法人 アジア学院

監事



監事



貸借対照表

2017/4/1 ~ 2018/3/31

資産の部

	本年度末	前年度末
固定資産	961,490,670	992,512,759
有形固定資産	856,976,442	889,825,536
土地	216,420,666	216,420,666
建物	610,198,648	647,323,928
構築物	16,164,226	14,233,220
教育研究用機器備品	5,961,164	2,806,678
管理用機器備品	1,851,118	2,454,570
図書	6,380,612	6,380,612
車両	8	205,862
建設仮勘定	0	0
特定資産	95,463,135	89,912,130
第3号基本金引当特定資産	72,875,584	72,799,725
退職給引当特定資産	15,918,650	12,915,554
施設設備維持引当特定資産	6,668,901	4,196,851
その他の固定資産	9,051,093	12,775,093
電話加入権	161,600	161,600
出資金	154,000	154,000
預託金	70,800	70,800
奨学金特定預金	8,664,693	12,388,693
流動資産	63,019,846	82,528,707
現金預金	31,037,501	72,015,438
未収入金	6,058,085	1,010,762
貯蔵品	566,500	423,000
販売用品	2,950,814	2,351,776
有価証券	16,895,271	2,537,599
前払金	5,402,373	3,974,808
仮払金	99,302	215,324
立替金	10,000	0
資産の部合計	1,024,510,516	1,075,041,466

負債の部

固定負債	125,633,473	109,709,224
長期借入金	52,320,000	57,580,000
学校債	32,300,000	9,800,000
退職給与引当金	13,196,530	12,046,840
復興事業修繕引当金	27,816,943	30,282,384
流動負債	92,230,742	119,114,624
短期借入金	65,460,000	68,543,433
学校債	4,210,000	27,710,000
未払金	3,998,182	3,101,013
未払金消費税	562,000	383,600
前受金	10,164,339	13,061,698
預り金	7,836,221	6,314,880
負債の部合計	217,864,215	228,823,848
基本金の部		
第1号基本金	1,115,708,401	1,112,633,121
第3号基本金	72,799,725	72,799,725
第4号基本金	11,000,000	11,000,000
基本金の部合計	1,199,508,126	1,196,432,846
事業活動収支差額の部		
翌年度繰越収支差額	-392,861,825	-350,215,228
内今年度事業活動収支差額	-39,605,633	-39,571,317
負債及び純資産の部合計	1,024,510,516	1,075,041,466

事業活動収支計算書

2017/4/1 ~ 2018/3/31

事業活動収入の部

	2017年予算	2017年決算	2018年予算
(単位：円)			
教育活動収入			
学生生徒等納付金 ⁽¹⁾	32,904,180	27,472,063	26,540,028
授業料	4,531,000	3,161,000	2,085,600
入学金	489,200	476,728	449,400
食事費	287,000	827,000	553,700
施設設備資金	287,000	827,000	553,700
国内個人学費指定寄付金	1,000,000	0	0
国内団体学費指定寄付金	16,508,000	12,589,000	12,864,000
海外個人学費指定寄付金	0	1,843,067	798,028
海外団体学費指定寄付金	8,125,000	7,052,765	8,000,000
渡航費	1,676,980	695,503	1,235,600
手数料	52,000	10,000	32,000
寄付金	61,862,665	58,283,371	63,519,502
国内国外一般寄付金	52,250,000	48,260,301	46,660,000
現物寄付金	0	0	0
特別寄付金	9,612,665	10,023,070	16,859,502
経常費等補助金	3,323,600	6,510,410	9,479,600
付随事業収入 ⁽²⁾	27,163,750	27,992,223	28,000,000
雑収入	8,272,000	8,005,662	8,702,000
出版物売却収入	500,000	566,400	200,000
施設設備利用料	4,772,000	4,946,650	5,502,000
その他の雑収入	3,000,000	2,492,612	3,000,000
教育活動外収入			
受取利息・配当金	50,000	20,534	50,000
特別収入			
資産売却差額	0	353,400	0
事業活動収入合計	133,628,195	128,647,663	136,323,130

事業活動支出の部^{(*)3}

教育活動支出			
人件費	77,555,424	78,074,307	79,129,456
教育研究費	29,239,756	20,838,233	29,086,599
管理経費	64,748,158	66,651,472	67,094,259
(減価償却費)	(39,605,633)	(40,243,996)	(40,162,674)
教育活動外支出			
借入金等利息	1,690,490	1,248,393	1,175,490
その他の教育活動外支出		1,010,045	0
特別支出			
資産処分差額	0	396,530	0
事業活動支出合計	173,233,828	168,218,980	176,485,804
基本金組入合計	0	-3,075,280	0
当年度収支差額	-39,605,633	-42,646,597	-40,162,674
前年度繰越収支差額	-350,215,228	-350,215,228	-392,861,825
翌年度繰越収支差額	-389,820,861	-392,861,825	-433,024,499

【注記】

(*)1 学生納付金には次のものが含まれる。

入学金：日本人学生納付金および海外学生に対する奨学金のうち入学金として指定されたもの

食事費：日本人学生納付金および海外学生に対する奨学金のうち食事費として指定されたもの

施設設備資金：日本人学生納付金および海外学生に対する奨学金のうち寮費・施設設備資金として指定されたもの

(*)2 農産物、加工食品、民芸品等の販売、プログラム等による収入。

(*)3 2017年度事業活動支出の内訳については、同頁右側の一覧を参照。

寄付金の種類別割合

合計 58,283,371 円



事業活動支出の内訳

人件費支出	78,074,307
教員人件費	19,012,308
職員(含嘱託)人件費	51,338,799
その他人件費	7,723,200
教育研究費	20,838,233
消耗品費	187,035
光熱水費	1,858,533
旅費交通費	0
奨学費	3,373,100
見学費	1,936,177
実験実習費	5,267,454
学生交通費	91,042
学生渡航費	3,202,523
教材費	218,737
研究費	371,688
宿舍費	143,861
学生厚生費	569,757
職員研修費	579,281
事務費	453,600
諸会費	69,450
卒業生同窓会支援費	59,000
プロジェクト費	141,658
特別講師費	1,052,159
車両費(バス・農業用車両)	1,263,178
雑費	0
貯蔵品振替差額	0
管理経費	66,651,472
消耗品費	183,756
光熱水費	1,858,534
旅費交通費	1,124,920
募金費	2,990,565
車両燃料費	1,030,664
福利費	49,420
通信運搬費	679,013
事務費	4,355,487
出版物費	544,775
車両修繕費	1,693,535
當繕費	916,960
損害保険料	924,430
賃借料	927,228
公租公課	979,950
諸会費	128,570
会議費	428,645
報酬委託手数料	1,632,683
補助活動収入原価	5,610,800
行事費	74,634
渉外費	38,704
雑費	234,203
減価償却費	40,243,996
教育活動外支出	2,258,483
借入金等利息	1,248,393
その他の教育活動外支出	1,010,045
特別支出	396,530
資産処分差額	396,530
事業活動支出の部合計	168,218,980

2017年度 主な農作物の生産量



山羊乳
638.6ℓ



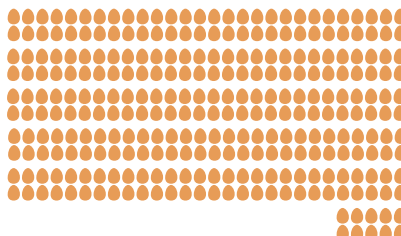
さかな
81 kg



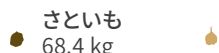
にわとり
488 kg・244羽



たまねぎ
578.8 kg



卵
105,017個



さといも
68.4 kg

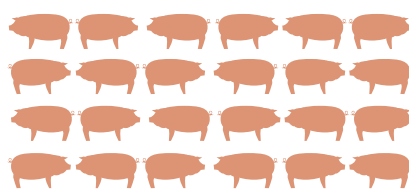
にんにく
35 kg



にんじん
520.5 kg
(ジュース加工用含む)



さつまいも
840.2 kg



豚
37頭



じゃがいも
1,483.8 kg



米
9,075 kg
(販売用含む)



小麦
3,000 kg
(しょうゆ・クッキー加工用含む)



大豆
1,802 kg
(しょうゆ加工用含む)



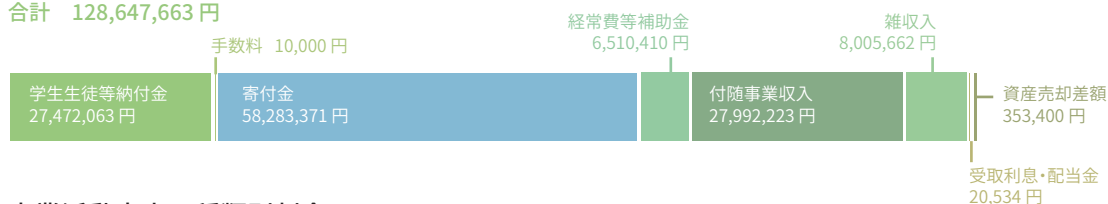
黒大豆
222.9 kg



(会計報告に続く)

事業活動収入の種類別割合

合計 128,647,663 円



事業活動支出の種類別割合

合計 168,218,980 円



2017年度 コミュニティ

名誉学院長
高見 敏弘

専任職員

荒川 朋子
大柳 由紀子
荒川 治
佐久間 郁
キャンシー・フロードイ
菊池 あゆみ
櫻井 将伸
大谷 崇
ギルバート・ホガング
ザチボル・ラコー
マイカ・アンダーソン
ジョナサン・マッカーリー
ティモティ・B・アパウ
佐藤 裕美
山下 崇
八木沢 淳

校長
副校長、教務主任
副校長、教育部長、農場長
事務局長、総務
国際関係
募金・国内事業 (渉外・ファンドレージング)
フードライフ (野菜・作物)
フードライフ (畜産)
フードライフ (畜産)
フードライフ (給食)、国際関係
教務 (学生募集、卒業生アウトリーチ)、国際関係
教務 (共同体生活、チャプレン)
教務 (共同体生活、チャプレン)、フードライフ (畜産)
募金・国内事業 (販売・庶務・広報)
募金・国内事業 (外部プログラム・那須セミナーハウス主事)
募金・国内事業 (ファンドレージング・広報・支援者サポート)

非常勤職員

君嶋 満恵
荒井 興柱
田仲 順子
小林 麻奈美
アニー・ジェーン・ラガワン
福島 昌代
ルイバ・ペロ
マッカーリー 里美

総務 (会計)
総務 (庶務)
教務 (図書)
フードライフ (給食)
フードライフ (給食)
募金・国内事業 (食品加工)
募金・国内事業 (那須セミナーハウス補佐・管理人) (6月～)
教務 (共同体生活) (6月～)

嘱託職員

藤嶋 トーマス 逸生
スティーブン・カッティング

募金・国内事業 (広報)
教務 (卒業生アウトリーチ)

役員

理事長

大津 健一 元アジア農村指導者養成専門学校校長 (~ 6月 22日)
星野 正興 日本基督教団愛川伝道所牧師 (7月 22日 ~)

副理事長

遠藤 抱一 アジア学院 法人財務室長

常任理事

門脇 英晴 (株) 日本総合研究所特別顧問

理事

田坂 興亜 元アジア学院理事長・アジア農村指導者養成専門学校校長
山根 正彦 元 (学) 香川栄養学園 常務理事
佐藤 範明 ホテルサンパレー那須 広報
荒川 朋子 アジア農村指導者養成専門学校校長
飯沼 淳子 那須友の会 (~ 5月 31日)
後宮 敬爾 日本基督教団霊南坂教会牧師 (6月 1日 ~)
香山 洋人 日本聖公会東京聖テモテ教会司祭 (~ 7月 21日)
小海 光 公益財団法人 ウェスレー財団代表理事 (7月 22日 ~)
矢萩 栄司 日本聖公会下館聖公会司祭 (11月 25日 ~)

監事

大久保 知宏 藤井産業 (株) 執行役員 総務部長
村田 榮 那須ワイズメンズクラブ

ボランティア

長期ボランティア

レイ・オリバー・ファブロス 学生選考
ウィル・マーチャント 国際関係・給食
エブリ・ブイエ 給食
オークリー・ニール 国際関係
スティーブン・ミラー 国際関係
ジュリア・シュトラウス 国際関係・農場
マーラ・ヴァイラ 農場
ルーカス・ヴァーグナ 給食・農場
ジュエルズ・フィリップス 給食・農場
ロベルト・ジュニオ・コスタ 農場
阿部 マノシ チャタジー 学生選考
菅野 まりや 広報
関 駿太 農場
杉田 真由子 給食・農場
田中 春音 那須セミナーハウス
寒河江 淨 給食

通いのボランティア

相澤 匡 農場
伊藤 正 販売
岩出 貴子 販売
上田 英二 農場
小野崎 仁 営繕
柏谷 重明 販売
坂入 貴子 給食
佐原 市郎 庶務
清水 益男 畜産
高木 聡史 農場
高村 京子 給食
西野 順子 販売
柏谷 重明 販売
林田 綾子 総務
東 千尋 給食・農場
平山 隆 営繕
藤本 和子 給食
伏見 卓 営繕
堀内 紀江 販売
三宅 隆史 販売

ABC (アジア学院バクレルセンター) ボランティア

高嶋 幸雄
西川 峰城 早坂 孝行
藤本 渉平 阿久津 隆

評議員

長嶋 清 元アジア学院職員
米田 ミチル 聖母訪問会総長
星野 正興 日本基督教団愛川伝道所牧師
門脇 英晴 (株) 日本総合研究所特別顧問
山根 正彦 元 (学) 香川栄養学園常務理事
久世 了 前 (学) 明治学院学院長
セラジーン・ロシート NGO/NPO コンサルタント
菊地 功 カトリック新潟司教区司教
福本 光夫 (学) 西那須野学園 西那須野幼稚園園長
小海 光 公益財団法人 ウェスレー財団代表理事
永田 佳之 聖心女子大学文学部教育学科教授
千 相銘 在日大韓基督教会札幌教会主任牧師
潘 炯旭 日本基督教団西那須野教会牧師
栗谷 しのぶ 弁護士、水野泰孝法律事務所
山口 和枝 元全国友の会代表
清水 たけし 東京ユニオン教会長老
荒川 朋子 アジア学院 アジア農村指導者養成専門学校 校長
遠藤 抱一 アジア学院 法人財務室長
荒川 治 アジア学院 副校長、教育部長、農場長
大柳 由紀子 アジア学院 副校長、教務主任
佐久間 郁 アジア学院事務局長



2017年度卒業生

農村開発科

- バングラデシュ 1) ローマン・バルア 立正佼成会 バングラデシュ教会
- 2) ウー・トゥアイ・ヌ・マルマ 立正佼成会 バングラデシュ教会
- カメルーン 3) アゲム・ビビアン・アンウィ 国際開発の働き手
- 4) エピエ・ダーリーン・トゥベ 農村青年リーダーシップと持続可能な開発
- 5) アケティニモ・オーステン・ジベン マルチ・グリーン・インベストメント
- 6) ネリー・シェラ・チャップチュット・ヨンガ 農村女性開発センター
- 東ティモール 7) ルイ・サルメントウ・アラウズ ウマイタニウム (私たちの家) クリニック
- ガーナ 8) オーガストゥス・セナ・レツクマ 福音長老教会 (開発・救済局)
- インド 9) アーシャ・ケンチャマナホスコテ・ジャヤツパ コーグ農村開発機構
- 10) ウィリントン・ムングレイ 自助努力開発機構 ルンレイ地区
- インドネシア 11) フィンセンシア・ダシ 聖クラレチアン宣教会 ルテン教区
- 12) リドワン・アウグスティヌス・サモシール ペトラサ基金
- 日本 13) 蓮見 千明
- 14) 武井 真希子
- リベリア 15) ジェネ・コリスン 地域女性エンパワーメント機構
- ミャンマー 16) サムエル カエヌムズング農村開発機構
- 17) ハリ・マウ マラ福音教会 (奉仕・開発部)
- フィリピン 18) フリダ・ドミンゴ・ラバン アエタ子供の家
- 19) エメリンダ・クヤング・オンカル ゴスペルホールに集うクリスチャンの会
- 南アフリカ 20) ドウドウジレ・プリンセス・ンカビンデ 日本国際ボランティアセンター
南アフリカ支部
- タイ 21) タラナツ・リンナサ 自由宣教財団
- ジンバブエ 22) タファズクワ・ドロシー・ムコンドゥク ヘザーチムホガ孤児ケアセンター

研究科

- カメルーン 23) オスカー・クエチェ・
フォーツィン
(2006年度卒業生)